





台徳公

督徳編卷之十

明治十九年
八月 點查章

公濱松不誕生一録母ハ

青山氏の女御幼号ハ長丸君御存也

秀忠公と稱し子孫慶長八年征夷大将軍不

法し終へり 居臣言行録下同

一 慶長六年石田三成加賀妙江派八と稱し

東照宮を教へんとし江戶(豊臣氏)一

門背向す多尻むすく湯を道すて水野



和泉守忠重 堀尾常刀吉盛不來令守 派八
水神の宅小坊き水神を討し堀尾由小派
八と突伏せり水神の家人とも是を知らざるに
敵ハ堀尾を心取早速江戸へ申す

東照宮御立旅遊遊遊遊吾姑婦子と捕らん
との 上意河原守日公麻呂信隆忠氏也
義士有り必父仇悪ふ共せし今一左右有と
以侍成さ遊ゆと 信上る御多愛入御柳
高来して派八の事と告果たり忠氏

公此御前へおきて 上意と雖も不有るより

御札

一 慶長十二年四月林道春と江戸小島し三略兼
漢書高祖本記項籍韓信張良陳平の傳と
漢書の餘ふ

一 同十六年四月友為十郎忠重 付中五七歳辰
伊勢守と稱し 谷市て
大猷云の 初七
年 傳さし心 松平長兵衛信經 松平
長
守更ハ菅子家次也同
金吾弟之孫稱伊五也 永井十屋忠貞 長年
前 道傳と

しん

因奉回二月十六日大久保山守將「孫不三河を
 江の古平野子より、孫上徳華山を圍むる
 数十里並と放り、涉能を折て、呼ひ叫ぶ聲雷
 の如し、不多志疎、棄てり、來り、湯を御指
 場（石主）より、忠徳云者、江平信玄大軍少て
 味方兵、出さるゝ人、孫不及よ、まゝと、座敷久
 事、十七日、麓之山、水城、孫不、以り、高松八十郡
 中川八平、兵と、い、海、一、闘、争、し、事、り、甚、長、者、も、お
 闘、云々、お、留、ふ、傍、て、自、為、早、然、也、と、も、御、法、令、受、取、法、隊

列と礼々辰

一 同十六年十月、至、無、事、始、の、序、江、平、入、せ、り、
 江戸布丸、之、公、繼、と、就、孫、不、御、門、外、と、
 本、迎、ひ、孫、不、大、献、云、并、忠、長、郷、八、御、言、聞、ま、て
 出、迎、へ、孫、不、東、照、云、の、左、右、乃、御、子、と、川、さ、
 御、座、不、入、り、せ、孫、不、公、あ、り、御、座、と、掛、け、供、
 座、不、而、多、佐、偏、と、正、信、御、前、不、と、り、治、勢、の
 御、難、儀、あ、り、數、百、步、送、田、川、張、橋、の、巢、共、不、
 事、不、遊、獵、孫、不、公、九、新、一、以、信、云、河、り、者、の

公は至者小ましくて誠を乞ふ者終不
東照宮遊覧し終るも日々延居を伺ひ終入
之小治具雜多りませ 御心と云々なり水依て
東照宮大小悦せ終る十月廿三日 御駕驗有不
還る者終不

一 同十九年正月廿日 公 東照宮と本丸小御遊之
遊り也酒饌と致せり 公御自身腰腹と御初
大献云 少終事小候一終不 公少沈乞の為
自ら終事と終りせ終る忠長御 八氣路向も終事
大細云

世々る 言ゆ 百 昔 終

一 公或時諸大名所議あり少終是地は

上之少 昔也 賦足相す 御能二當之 思の信
水と不狂云 出も不 俄小地震ゆり 山ゆり 山
是地の西へ 互小形とらん 今せ 内中不ゆり 幕
是也 是を一人 一人 一人 一人 一人 一人 一人
半少 度 終る 終る 終る 終る 終る 終る 終る
公は昔々少 終る 終る 終る 終る 終る 終る 終る
終る 終る 終る 終る 終る 終る 終る

駿河殿十歳小威しそは公卿座の服西不
屏風を隔て御着座之地震河より治き居青
山伯耆守 大猷云と抱きなり 駿河殿も御
例の礼抱き少徳多の少座之御代中も

大猷云よこ小 上極ハ少座之出取最若り也
少座有り伯耆守十首一極是座十上若れハ
上極も少座ハ少威されは不何そめ斯
御代中も有り 御代少て伯耆守頭少
叩き御立極より 梅標二首より香しく紅也

室家極ても隠れなりは此中とそ人
こそめて感しそ也

一 御他界の以天海僧上上若ハ少代の儀ハ先
自佛小なりそは物多きよし少座不云上者
若れ也 上言小僧宮居知れ也 男も小極別ハ
事小ハ天口と御取なまされり也 皆佛不没ハ
中と存也 御茶小ハ 東馬宮少侍是是之
少佐ハ遊三れり也 柳少自身の御多物と豊
これハ 東馬宮小ハ創業の此事と申し御智

友人間の事と云ふ所は其と云ふは是れ神小
説ひまりても阿きくは思ふこれに御前の
少成の中し思ふ事も是きく唯人の我能く
をりく一月と云け自の事を知りたる有之と
上ききて神小なるも是れ後神小賢君の少
岩巻と天下乃人感しきり

御前神小成りて其の時分は行六の小出御
地より一と少福是の事あり内と有運り少
福居上りて是れ事不六の打ちも御成り上り色

くけても之は神小者云せきと成りて是れ是は
諸人(御前)と云ふは此の事あり思ふ事は其の
御心を御事新の如し神定の別派と御成り
神をあり抱き進まふよりて流を登り心は
神居るより進み神は自他神をわけて新と
又或何の神神神神と成りて居りて有て
神七の神神神神も御成り持居りて居
出する所は居るより大なる神出り居りとも
神神神神も神神神神て出る御前小八六ツ

前沙路石より色 沙装束 拙く通く

上意不習道とも有るを 修む 沙次の流十廿六

焼火の燃間不揃ひて 遅れし 打撃を初し

兵兵と有るれ 八則 焼火の 間へ 出御せられ

御前より 上流せられ 拙るして 八威 有るを 修

う 沙路石 通くも 此面より 八 沙路石 有るを

沙路石 上流せられ 上意不 端り 沙路石 共の

内と 聞き あり 上意 あり 上意 不 修む 共の

妙く 且 御前より 有て 有て 上意 あり 上意 不 修む 共の

一 上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

一 上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

上意 不 修む 共の 上意 不 修む 共の

変に侍少控並に下敷して時をくぬ相おし
おも可くせしれを少例名乃相誨之

一 敷して常少控能少度をもれ別おも
少後代右名少護かると病北の他社申言と
なると品今とよき少控能も忽替り相所相も
有る人ふよりてハ少後代のりも教度有
り少後代不具勢あて大考入りてせよこれも
天下の士と常少控は是の如く思ふよりて
新のよしし 是と少控人有りて所し感懐ふ

極はり

一 北の方不敷く彗星出て世人是とんて如何者と
今ぬ或は少控ふ下く此星と礼送あんと
疑ひりり 少控はこれ何とよ今並して
足り大考を天下向乃星一ツ出ると何と
出あり名誰も存せ我玉是非南り
ふとを思ひ少控思なりと上能ても無く
ても天の勢不顧りて事と字てり人百より
感すや是皆愚なりとのヤセし事と

上意にて毛泥所心不無れ凡些不也極本の
面々之味下と心と女ん〜とや

一 御習事とせられ亦道と毎度江戸の沙智見
方々をこれ沙直不也聞控する之角不金物と
之の才覚有者あり 殊不沙意不寸ハ御成
也り有との厚贈と名不也さ道鳥の依て
居ゆりありと中より不 必沙産不(出所せられ
以禱を交せ道)金助ハ沙直不の少産不^産
意也一時も沙直控すると極の下人と終不沙直

一 一石し上り道ゆ事是なくハ御用沙直し
控(道)ゆ事有ハ沙直不と成くせり此所所行
飯交爰此事なり

一 誰実を知りよと中人をさるれとハ沙直氣
法り沙直き時分沙直乞と思召さ道とや
大献ととをさる道色ハ沙直云はる 大献云
ハは沙直度法り方々之危角の沙直なり
公上意不何とて左極不也然欲是あり人百生
死の習々多不非也只今もハ沙直界地と云不

能致()と云ふ 思ふべき 公威重き也 此は在
政りかり 菩提心有 大猷云沙事 末意の批判
何()と 思ふべき 菩提心沙事 是阿多事なり
何しと 思ふべき 一なりしと 相又

東照宮公は創業の天下を自らも問ふ是をきか
ずして 治世不立てハ沙は在 御政成()と
思ふべき也()と事()あり()も此何の道おも 明君ハ
並ひて多 事也 御遠之 誰か()ハ()も
天知地知人知して 之比 此道有の 何()と云

事の海世 殊()ん事と 思ひ 此() 若()也
此の如き 相若し 修治の儀
弟の君は 伊佐を
改むる()と云

一 沙道智元 常小()と云ふハ 一也()て 沙道森の
内()日の 秋()の 墨の上()と云 沙踏地()と云 凡日ハ
影を 沙()す け 沙何()も 世()れ 是 天()と 云 方
の 事 沙 財()あて 天 道()と 云 御 忘()也 此()と 云 事()の
沙()の 事()なり 一()
日影小日何()る 道と云()て 忘()ふハ 凡日
輪()の 上()に 影()を 下()す 事()なり 一() 是()カ 云 佛()の 事()
位() 沙 事()の
上()なり 一()の 事()

一 沙道智元の 村()も 多()所()不()存() 一()志()久()也() 何()り 此()道()智()元

少き道若れを掃部威程の意して
天下の礼乃端と爲るをも嘗て目録有候と稱せ
ざる所少許と云ふ大物成と云ふ所存あり候
そと一候し若れは之事少く大坂御陣の間も
なく江戸御陣其石垣乃少許許并不驕有候
城少許許之介治音は御少許して天下に大
在園家大方なる所少く又も也 末幸康徳
長遊されり 公方極の少後後軍家下
の能をとも其は侍ては園家より下と判成

成を若くして有く候へを一候の致き礼の中
存あり御目録存あり少許事と云ふ存あり長款り
り候所ありありありと大物成と云へきを
うん御種不違存と云ふ事若れは掃部成
又は之を後成と云ふ事不違と云ふ事と云ふ
され若れは是と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
御目録と云ふ事掃部成と云ふ事と云ふ事と
一と若れは是と云ふ事と 上意して大物成と云
御目録と云ふ事 上意不違大物成と云

十廿六日 秘使も とも 老妻 侍り 伊周少三く とも
神小 秘使り とも 老妻 侍り 伊周少三く とも
事 天下 少長 之の とも 目 勿 存 事 少 とも
掃 於 氏 とも 道 理 亦 あり とも 明 法 大 意
右 出 道 掃 於 氏 とも とも とも とも とも とも
中 上 とも 掃 於 氏 とも とも とも とも とも とも
法 大 意 掃 於 氏 存 事 亦 あり とも 中 法 大 意 とも
上 意 何 とも 掃 於 氏 存 事 亦 あり とも 愚 意 亦 あり とも
吾 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

之後 又 諸 大 意 とも とも 掃 於 氏 伊 周 少 三 とも
明年 の 少 徳 在 也 とも とも とも とも とも とも とも
海 とも とも とも とも

一 元 和 三 年 法 上 洛 の 時 後 陽 成 帝 御 座 進 々
石 今 將軍 亦 汝 父 の ため 愚 見 是 とも とも とも
朕 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも
國 亦 亦 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも
法 大 意 掃 於 氏 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも
と 施 亦 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも
子 孫 亦 亦 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも
朝 家 の 國 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

とてまゝに治を改む所の天下を仰ぐ意日
心向ふ天運亦移候心許すとも勅使を據
畏りまゝにまゝとて如く之を心を用ひて一せ道に
まじらばとて也

- 一 寛永三年太政大臣補任より所務進向り
- 一 同九年壬申寅月廿四日 公薨御時年五十四
- 一 寛永二年序と源世長行幸向り 御氏式大
抵秀宗の飛出より幸小准氏御初の金有

度の智もまじりきこれ此れ
是くまゝに其れを御りては

公御歌

呉竹は兼代まゝも其れも
後不阿の如く君の御りま

大猷公御歌

御幸より我大志を兼代に
千尋は此れまゝの御り

尾張義並に歌

我を齡より少く呉川に

弟久ぬまを、の代よりし

紀別頼宮石

弟代より、に御幸れりし

より、あまの竹のいりか

駿河志長に

静なるに、れは、の、弟代の

無^り可^らず、り、の、物、は、是、行

水戸杉原に

我を代より、す、は、其、所、也

望^みぬ、新^しと、し、道^の、の、ま、し

世長云、大政を臣に任せり、と云

一 同七年御即位の詔に曰、御位を第一の皇弟、

隆^りの、昔、京、良、の、弟、と、は、教、代、た、つ、せ、り、と、も

世平安、誠、ふ、り、の、ま、を、隆^りひ、て、後、は、八、百、年、の、傳、り、て

よ、の、ま、を、ま、り、事、を、り、世、の、は、ら、小、同、に

及、道、隆^りを、後、に、奉、朝、の、神、是、り、て、天、照、を、神、の

ま、り、り、弟、神、と、て、天、は、日、嗣、と、弟、世、を、り、て、神、に

後を以て之も久く稀なる御事ともしすれハ
若流代御外戚の御體少くかゝ事も有る
やんと云ひしをせと後ハ春の事としゝん後と
商人と云ふせにハ一まといと見ゆ一志ハあれと
御殿使の 敵^あゝ^くとの一後ハを述べ給ぬ
さ七後ハ及ぶと兎も角も 敵^あゝ^くのまゝと魚
も中ハ威ぬ 武家より 極其素と宗統ハ後ハ中
他ハ及ぶと杉胡ハより以末双ハより中
さ上御事とさりゆつて 善抄の政といひせ

後ハ竟の舞ハ瀆り 舞ハ高ハ瀆りし昔ハ皆素素
ての事とも也 後ハ今春然ハ留せにハすて
姓ハ雲を眺め流水ハ風と後ハ後ハ中
後ハすも伊計ハなりと 武家ハ四ハとも
敵^あゝ^くの執の訓と武家の政ハを明くふたハ
やけと後ハ後ハ 御知帝の御事少くも
さしと守りハ威後ハ人事ハと安ハし片
道ハ不ハりいせ後ハ元 武家ハ少ハりさしハか
止^事後ハ後ハを去程後ハ今日 御印位ある

皇女 右皇女 仁子の

御病不癒をまじり 仁子の 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子 仁子

院と柿 仁子

一 寛永五年松平中將大補忠知の家臣訟有云

公胤一在これ河代への由光定和者を執控不

仕をそ 双方をさ道 決を何とす 雖依

式附十五夜の月出所分少く水柱され月と

少後と此上喜宗月不勿れて是月と居れ

御手水子けり女中へさす月不 二不勿れて又

者々 御病有若れを 女中 二不ば見えよん

と 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

天下たを二不勿けりきと 御喜是阿り

さ長 御手水子けり女中 御病有若れを

ゆり 一 右 敬云 御喜之 在の月の依を海原を病を病への

足元

一 薨御の前年 海河大納言 仁子の

大秋云 此中の 少悲 一度 御喜 仁子の

之 敬云 或 御喜 仁子の 書 月 一 色 少 出

是を沙流りて後れ沙流の所不馳河原
世書の影ひ也唯今より言知り言程み哉
内かてより至大福城不疾位信友との依之
め新此口事お何々て對面水取(きやとの
所意是阿りり後れり也 大教云所西書し
と也

一 同日事 同日古 東照宮四年不沙政尊感
御不倒江戸小若事々 公二月部り 御新智二
日贈府 志御

四月月 東照宮慶康不依く 諸大名駿府不備
定て先ッ江戸小執りの諸軍の奉年とも國治
之後帰至言位信と老臣おとゆめ存り所不各
駿府より至不沙流とより帰至まきのみり
土井利徳中後れれと 公御政道の廣大よふ
事と諸大名感悦せしと也

一 寛永元年 舟中 板倉原公守勝重平氏之子
因信之御書を賜ふ

伊賀守とて 死云一危心中一程慮也其々

不徳、沈舟不及也。球事、り也。

五月四日

新撰不
記

梅谷貞厚、との

一 大徳氏、利、爲、事、卑、下、者、人、を、し、世、を、

水、下、に、沈、む、る、子、乃、孫、不、也、也、も、実、は、

東、風、堂、の、御、成、風、なり、と、世、を、治、す、之、は、成、人、

大、徳、氏、へ、と、是、無、は、と、なり、 東、風、堂、不、也、ま、り、

な、る、と、し、ま、り、一、座、の、而、も、者、お、す、り、似、て、ま、り、

と、の、り、と、有、者、は、不、何、 而、風、堂、不、似、と、何、智

ら、ど、下、り、理、音、出、は、不、無、を、利、を、成、し、才、登、壇、者、

高、才、世、に、治、す、の、能、能、を、第一、不、立、者、不、大、徳、云

少、能、を、立、す、さ、ま、ら、大、徳、氏、心、を、て、利、り、控、者、

世、を、心、の、二、字、お、
んと、有、て、守、り、之、 世、を、不、似、せ、智、す、七、席、ハ、又、と、み、立、と

云、て、わ、り、ま、り、御、り、ま、り、之、疾、疾、の、初、り、を

悉、く、利、控、す、之、有、ハ、大、徳、氏、と、を、古、き、人、に、也、

去、程、不、難、業、以、志、世、と、大、徳、氏、利、爲、も、成、感、と

漢、り、何、井、漢、傳、も、忠、獨、天、下、乃、大、亮、一、者、り、

流、の、非、業、氏、忠、信、不、成、路、也、也、 世、を、治、す、之、一、也、り、

世、を、治、す、之、一、也、り、

之帝尊云云
尾近一考

徳と澄波守ハハ出さすま五世

議定の事ハ志長少極めさせり版取以て
君上と敬重誠の志長と志世利孫志徳と世

以て徳と稱し弟も青山御者ハハ 大猷御茶

滞り有く通震しも弟も志長也 事ハ大猷孫也
はるふ 大猷の子也

中なり 公御自墜之
此考もハハ小是也元元

一 寛永九年正月廿四日 通仙院言法印ハ 大猷云

向度落所今夜亥の刻薙死御年五十四

一 公の御子ハ沙八人有り 所謂 大猷云六志長御

三六秀頼の室ハ利光の室ハ頼前宰相志連

の室落言因頼と号す六ハ帝極若狭守ハ室七ハ

女院ハ僅種 照彦守正之有り

一 大坂を陣の長島山崩して 埋火を御所少月也不

為り 將軍極の御先子色也ハ山崩り沙也早

血骨も言名とハ魚也之也 御所之助走

少月 將軍極の御馬の儀也ハ人少し 將軍極

御所身御も院と持ち敵乃中ハハハんと

追せるハ安否對馬とせ也 御馬ハ口と北條

ゆり新奉多ち陽 賀た馬介 尾田家前守池島
少護和とくこのか 將軍様 少中初少て少護
と道とく也 三枚平丸少護と押立出願しうは
味方の中と押立りて 敵軍進くと押立派と
前少何て少護と 立少中く 見少威は立少
とと見少 敵とくも 川前り 味方三率少
融と城門入道はしと

一 或村 公上喜不侍は常く 三ツの心は立しとく
少一少乳道立舞舞 示地雷震雷舞 示火事

此三ツ不意不 是河平事なれと 三層少の形七以
為て 三夫して 是少少少 初て 辰前り 辰天
少少少 夫とく 辰を 辰前り

一 公或村少何の序少 所意と 辰前り 初て 世の
乃中なると せし 少護世は 夢の世と 一寸先の
やと 少れと 只一時も 樂むと 少人 少の 樂られと
少少少 少は 忠少 少は 少は 少は 少の 少の 少の
少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の
少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の 少の

くんとり 上書あり

一 公永少短の内お徳一も 少長楊も徳を
りよりし此を少長申されども 下りの徳を
毎國々もして道にてもありて 世に之

御意徳も 徳く少長申すは少用の徳より上
さるべしと 大敵公徳よりして少元中より上
これと 公御意申すなりと一と 少長徳を
はらへし心ふかき少長徳を 徳なり 少長徳
されども 少長徳なり 天地の日月の徳なりと

わく名 天り乃之 天り乃之と 天り乃之と 御徳
をこれと 少長徳を 徳なりと 徳なりと 徳
徳なりと 徳なりと 徳なりと

一 公多徳の徳なりと 徳なりと 徳なりと
りよりし 徳なりと 徳なりと 徳なりと 公家
徳なりとの時なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと
徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと
徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと
徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと
徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと
徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと 徳なりと

とく 沙用沙達し又出度地より道に成るまで
の毎朝了てく孫不沙礼法中き隨君よりと
沙用智元とせし之 公花を好ませられ也
その成花諸公より 若くは中不唐源志のり
して見や成花の椿を継ぐ上は是を成花
畑不椿を多きまのり世椿咲きと一面事沙心
後一貞三年とく後椿咲き也注を有るれん
孫の外より御後若少くは御不咲くも是の
なりと 沙用椿をれられとも上流是なり常に

一
即ちと 沙用無事は花咲き不滅せし世御後
なる事 沙用の流子皆一若くは花咲き御後
沙用中より 外へ出度地されりて天不沙
常り地されり天の怒れと無きされ出度是
なりと人々也

一
公は 神君を孫の外御左切不地され常に所
正世の如く思ふされり初御何ふて 秋土を地
先御安くされれり中事とし熱て管き居候
少て互相の中不及びは御度のみ御事にて

毎月燈り 御祝儀 御火煙蒲團諸色物々
十七日六燈りなり 是程の御信託 十月五日
八日にも 徳を御夜法と云ふ遊子れ不為し
少庵の遊されぬ月 西夜御堂少くも御夜遊する
魚子也との御信也 十七日 乙て 少水少を
少庵の遊されぬ月 御信と 冥申少くも少入れ
拙されし御 社未お願まてハ少庵の上少信と
阿とのけく 並せられぬと

一 公何と 思えされも 御心持やん 十七日六燈り遊と

五平 御道具の 御自利 少庵儀 是者之儀 少
道々も 今も 出次人 元の 道々も 借り 御目小
る者 是 是 是 御心之 外 移され 少庵の
少事 今も 今も 今も 今も

一 秀者 能見 物 之 其 左 右 小 公 兼 少庵 身 次
法 正 見 物 なり 小 朝 餅 ずり 捕 入 出 虎 巻
入 幸 龍 巻 渡り 右 見 物 の 場 荒 島 秀 者
小 む び 小 秀 者 秀 乃 也 乃 也 法 正
少 也 法 正 太 刀 少 也 少 也 少 也 少 也

虎別公(駐)御(人)じ(る)を(御)あ(る)に(於)ま(れ)
け(こ)を(長)く(と)遊(び)て(り)て(か)ま(り)さ(り)し
と(し) 公(御)遊(覧)あ(て) 御(丈)高(く) 伊(勢)河(内)
御(區)和(平)て(程)々(と)御(生)質(なり)ま(す)

一 大坂冬陣の良 公(備)米(津)東(出)兵(夫)倉(不)守(也)
遊(れ)城(中)より(石)火(矢)と(打)り(ま)す(御)盾(と)
ま(り)と(り)序(庭)の(柱)を(徹)底(至)別(る) 公(御)也
勤(美)然(ら)ば(借)守(の)由(と)志(の)後(不)城(中)不(い)
箇(志)り(て)あ(る)程(を)思(長)為(之)と(よ)て(又)打(と)

是(く)て(今)冬(玉)櫓(の)上(を)聖(子)耐(出)家(元)
底(立)花(飛)流(守)佐(之)備(希)守(因)内(信)御(側)
と(り)御(不)ま(り)て(後)の(所)不(大)孫(さ)り(ま)す
あ(ら)の(少)く(と)中(と)夫(倉)より(下)ま(せ)り(ひ)
り

一 十月九日 志長 郷 頃 奉 稻 富 宮 内 師 了 々
御(地)稻(吉)河(り) 然(不)々(旨) 西(丸)古(居)あ(て) 燈(と)
手(取)御(舟)堂(不)秋(せ)る 御(舟)堂 御(長)役(科)
手(取)氏(之)夜(公)奥(不)入(信)河(り) 件(の)略(之)當(初)

とて進せし御産所佐古園谷掃留の指
南と文流能と誓在侍りし日 初て鴨と打ち
送りし日 則彼鳥吸物とて進しし云
公と御産所佐古園谷掃留にて世鴨八向くして
打ちし日 御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
侍りし日 公御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
られ日 奇怪の御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
流し日 御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
御産所佐古園谷掃留にて打ちし日

世城不存。然不城^印不廢子と云ひ家人と云ひ
主人の城不むらひ流能と放て一ふ六天理平
背きし日 神君の神意行りかて二ふ六
竹千代主御り関りし日 之を忘れなき御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
斯日 吾道の働身 同様にし日 之を忘れなき御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
之を忘れなき御産所佐古園谷掃留にて打ちし日
房を建ぬと云へり 忠長卿の世のとき
まひ 忠長卿の世のとき

一
元和六年八月九日 壬辰 辰止御産所佐古園谷掃留にて打ちし日

高方八度長五年石田三成に 神君不敵し
石田依り 龍尾玉柳川十万余子六百四十七
石を没収せし玉柳川城を陥る 知事勢を
消滅信陽守勝茂不討し 時平一人を執りて
後更に城を加意す 神君は信陽守を以て之を
威し 一命を賜ふ 秀州松倉僅一萬石を賜ふ
支那恨意なく 神君は信陽守を以て之を
これ依り 玉柳川領者之言相違なく 下り礼
自今以後神君勅と廟を願ふの旨 上意有り

宗茂藩下 神礼等 祠を築せし 唯長法殿有り
之後 近云云

一本多上座外正純宇於文 十五万石を領民感と
言ひ 日頃の恩返し 國不違 忍能知石云云
流罪不致也 抑正純の文正信を仕奉り
神君不仕 事り 贈臣の在有り 神君も 終不
二萬石を領民感と 御加増有り 石云云
持領せし 嫡子正純の二萬石を 赦金十五万石
神君養育後 公より 宇於文を賜り 御加増

少く 十萬石と有り

正徳の御時よりとも五萬石の言ふ

此を以てと十二
前名を以て

父小治は其の智恵あり人なり 公は

けりし威ふ十倍せり海不天と云ふを

也と云ふり其の父の時より少治の根来者

阿の正徳是と小是恒業不業法の御時

と 中治百人の根来し其の我も其終不

是恒業の御時 一と云ふなり又肩ふらり

をこの世の中威ふあり正徳の御時

知りへ檢ふ不行 一と云ふ根来し其の

則百人の根来を百村人等 別居の家人百人

中其根来百人を一日の中少ありと云

死骸を埋て一と云ふ極を樂そ根来極を

ケ根の二徳行好有るを 尚阿の威勢

正徳の御時不恐れ 一と云ふ 其の元

和八年に月十七日 公卿は其の元

阿の正徳也 一と云ふは此の時と云ひ

と云ふ 其の時也 一と云ふは其の時

漢と稱ふは 一と云ふは其の時

窓小十八油也、神文ませ、ハ一七事と無、
 少庵くまり、と原を、今夕夜、志當城、少藤君
 され、城申、善法と舎、夫、少舟、少陽殿と形、
 作、之、舟、小大、石、さ、あ、ま、空、甘、の、極、と、ま、り、て、
 天井ハ経徳、わ、く、清、正、御、お、ま、の、付、天、井、ハ、ま、の、板、
 海、京、一、度、不、着、く、や、り、小、一、つ、ら、人、我、之、終、成、
 我、之、海東、向、人、大、存、中、て、と、す、一、外、入、
 之、と、ま、り、な、る、れ、と、今、此、と、な、り、て、之、少、阿、く、
 弟、大、三、と、信、ひ、一、と、又、大、岩、お、ま、三、と、い、

一と末、書、海、東、四、ひ、一、と、安、く、と、突、合、て、不、り、不、
 定、の、色、根、さ、り、之、純、四、ひ、と、り、神、文、事、事、な、れ、
 とも、石、雲、り、あ、一、と、善、法、多、も、多、舟、の、と、な、れ、
 考、の、一、り、一、命、是、危、一、海、と、清、せ、ん、お、は、お、り、し、
 として、窓、小、大、之、夜、教、く、とも、水、道、と、い、も、悪、や、た、の、
 妻、世、り、と、憤、り、夫、の、罪、を、く、と、殺、さ、し、と、い、ひ、子、
 之、之、純、湯、殿、善、法、の、事、と、は、人、海、一、と、ま、ん、と、
 度、と、日、水、繼、く、と、来、一、と、純、の、終、成、と、海、不、也、
 役、人、中、大、不、善、文、の、月、せん、と、い、れ、よ、し、

一 隱者の魁の事して人之を其業小あはれ
今我 君秀馬公諸藤系長一後以て一藝
之も魁の故に天下乃治不御心を遣ひ
之氣此深き事賢人の乃の治少へし之
の及となれし御父亮一後以て一後
寛急くけ今事して其也後を天
聖之何り聖人のいふ事
寛永九年三月廿四日 御形見廿五
少月 御三家方ハ御形見廿五

一 慶長十一年 正月 柳宗式於大補 康政為不帥也
公蘭之 一 西井忠世 土井利備 之病中 不御亮
醫師 延壽院 玄相 玄相 玄相 玄相 玄相 玄相
上座 有くあり 寺 館林 不歸て 年 凡 阿部 藤 備
中守 三 次 丈 命 して 新て 妻と 同せ 終ふ
一 檢校 極 藤 向 山 御 隱 在 遊 幸 也 大 御 西 極 と
十 廿 日 台 徳 院 極 江 不 有 驛 向 一 御 出 兵 成
二 九 六 二 月 河 守 御 律 為 成 少 事 也
檢 校 極 藤 系 乃 爲 と 不 して 将 軍 小 八 年 之 爲 事

人之縁は在二月ふなりぬ花申徒我を多し
花を傳ふて華をもちて裏道より忍びかぶ
や道と一屬もなまき之我言ひさるとされ
なま隔心有りぬ一汝心伝ふよくとくへと
信じてされも阿茶丸局所心乃漸より上意
なりと御居して花之伝十八歳女中才一乃
與人をなまきと結ぶ不儀の色下女も華をもちて
初秋の次うも道より密ふと華をもちり内河茶
の^丙よりかくとすられも 台徳院極上上と

石一侍也孫少所小花多りて侍居の戸を音
つてはれハ 台徳院極御月力やくととぬ
さきも花と上座ふき華子を侍居是ハ
大御前極よりりまきとくもなりとてはれハ
たま花あり論もきりと侍居也也侍立
なされ戸はまき侍送りなされられハ花巻て
とくもとて送てそふ未洞もなまき論りてあや
くもとくもられハ 檜根極同名將軍ハ早あき
す一の人きり我は志ことくけても及びくも

上意有り節日 兩夜燈

一
台徳院極中上法乃長尾港の中城へ入せられ
夜の四時不沙留ありしハ尾張殿ハ御それなりと
上意有りしハ沙留の元兵今火の元を御見送り
とて御留より見送りせし是なりと申すは是れハ
是ハ幸しき事なり 上意や之殿 義正卿へ
言下り有るれハ御前へ出せしは是ハと
上意有るれハ 沙留廣海く等し給つた
上意不々常不志しは有る事なりとは是の

城中よりハ武法者上たふさし其家ハ極若なりハ
杉列より 長尾の内へ入ると是也 上意有る
うハ 義正卿も一間の内へ入せしは之後
上意不ハ我ハも湯廣合へり其ハ尾張殿も
何れもさしハ湯廣出りしと 上意や此程荒
名き 沙留所へ通祥なりハ宮中御前御使
役人ハ御使の長者ハ御前沙留廣と云ふ御使
在りし御使更と云ふ也 義正卿も沙留
一ツハ之ら御使なり 上意も有るは是也

と意少く則通堂河り相承小世とありにたり
少指と遊き遊し一葉酒持来れと信有るれハ
則為来りふも百くく遊義直卿も此意か
有りしと河津の吾もあれハ阿道ハ河内少と
卿君を若れハ九つ少てりくく上居居少と
明朝子不氣く遊ん我も休まん少作少
義直も思出有り少葉酒少好く成りも
卿君とのへさくく遊ん少御むつ少き少根
子も若れ少幼とくくくと若年小及ハ八木但馬守

直徳と阿一と堀氏抄法せ一市邊七前在るも
と度不居て今二乃九卿君之阿少上居のおの
方曲水の居少ての事と出せ埋穴下向

一 台徳院極成付此久念入卿君を托り弟も折

かちちりく少く難子乃若せくを居阿道く
阿道ハハく少てりくく少指托り弟も不
尾張殿の居友少て少存り少御例存り上
られ少少小性上居臣殿少補至極之猶若少小
綱少亦多其作を少使少若れ長く江戸流

有りしとぞ

一 台徳院御代は分限御世不感くせしとぞ

赤の御世と云 佐田の安沙御世よりあり

少て小島と云ふあり 中御世より 出陣此れ御

魚島の方中より 是れ少く急交御経路此れ

り又此屋御世は又此御世より 少計と云

上より小葉の少計の上より 大なる御世より

少計御世の世を少取御世より 是れ御世

此れ御世より 是れ御世より 少く是れ

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

是れ御世より 是れ御世より 是れ御世より

智德編卷之十終

